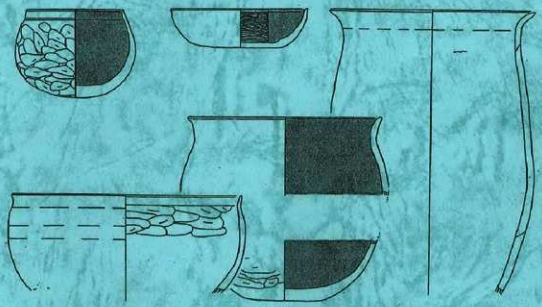
真田町埋蔵文化財発掘調査報告書

よっかいちいせき

四日市遺跡C地区

―真田町農業協同組合農機・オートセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書―



1994.10

真田町農業協同組合

真田町教育委員会

例　言

1　本書は平成６年３月２５日から６月３日の間に行なわれた長野県小県郡真田町大字長字四日市に所在する四日市遺跡Ｃ地区の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は真田町農業協同組合農機・オートセンター施設の建設に伴う事前の発掘調査として、真田町農業協同組合　組合長　北島鯨波夫　の委託を受け、四日市遺跡Ｃ地区の記録保存を目的として真田町教育委員会が行なったものである。

3　遺構の実測は和根崎剛、川上麻子、田畑しず子、柳沢和代が行ない、一部を（有）写真測図研究所に委託した。トレースは川上麻子が行なった。

4　遺物整理・復元作業は和根崎剛、川上麻子、相馬敬子、田畑しず子、柳沢和代、横沢初枝が行なった。

5　遺物の実測・トレース・版組は和根崎剛、川上麻子が行なった。

6　本文の執筆は和根崎剛が行なった。遺物の観察も和根崎が行なった。

7　遺構・遺物の写真撮影は和根崎剛が行なった。

8　調査に係る基準点測量は（有）写真測図研究所に委託した。

9　本遺跡の遺物・実測図・写真はすべて真田町教育委員会が保管している。

10　土層および土器の色調については「新版　標準土色帖　1993年版」を用いた。

11　調査参加者（敬称略、五十音順）

青木益繁・青木幸子・一之瀬貞美・大久保きよ・岡嶋庄平・海瀬昭子・海瀬徳子・海瀬正之・草井やよい・関口昭己・関口敏子・関口嘉弘・相馬敬子・田畑しず子・寺沢久吉・中村いくよ・中村さわ子・柳沢和代・山崎千秋・横沢初枝

12　本書が上梓されるまでには非常に多くの方々や諸機関のご指導・ご協力を賜った。以下ご芳名を記して感謝申し上げたい。（敬称略、五十音順）

川上　元・川崎　保・（株）楠建設・倉澤正幸・小平和夫・長野県教育委員会文化課・町田勝則・廣瀬昭弘

凡　例

［遺構］

1　遺構実測図は原図１／２０、縮尺は原則として１／８とした。
2　遺構の切りあい、または後世の攪乱等によって遺構のプランが明確でない場合は破線で示した。
3　挿図中におけるスクリーントーンは、下記のものを示す。

遺構構築土　　焼土

［遺物］

1　遺物は縮尺１／４を原則とした。例外はその都度提示してある。
2　挿図中におけるスクリーントーンは、下記のものを示す。

須恵器断面　　黒色処理

目　次

例言・凡例
第1章　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第1節　調査の経過（抜粋）・・・・・・・・・・・・・・・1
　第2節　発掘調査の体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第3節　発掘調査の内訳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第2章　遺跡周辺の環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第1節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第2節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第3章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第1節　遺跡および調査対象地点の概観 ・・・・7
　第2節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第3節　調査経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　第4節　遺構・遺物の概観 ・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第5節　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第6節　検出された遺構・遺物 ・・・・・・・・・・・10
第4章　調査の結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　第1節　縄文時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　第2節　古墳時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第3節　平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
　　遺構・遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・16
　　遺構一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　　土器観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第5章　成果と課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　第1節　縄文時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　第2節　古墳時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　第3節　平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
写真図版 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
報告書抄録

1　調査に至る経過

真田町大字長字横尾及び四日市では平成５年度から６年度にかけ、長年の懸案であった県営ほ場整備事業が実施された。これにより18,300㎡の非農用地が設定され、その一角に真田町農業協同組合農機・オートセンター施設が建設されることとなった。建設予定地には周知の四日市遺跡が存在することが判明し、真田町農業協同組合および、県教育委員会文化課、町教育委員会により保護協議を重ねた結果、公共性の高い施設の建設のため発掘調査のうえ記録保存も止むなしと判断し、建設予定地にかかる部分について事業者である真田町農業協同組合が発掘調査費用を１００％負担することで合意が成立した。発掘調査の期間については、平成６年１１月に実施される上小地区農協広域合併による「信州うえだ農協」発足までに建設したいという真田町農業協同組合側の要望により、６月初旬までに調査を終了し、終了後すぐに施設を建設することとなった。なお、調査に関して測量の委託については遺構の測量という専門性を考慮し、町と測量会社との間で契約を締結するということとなり、その費用については、委託金として町に農協が支払うこととなった。

1　調査の経過（抜粋）

平成６年度	
１月２０日付	文化庁長官あて文化財保護法第５７条および９８条による発掘調査の届け出。
３月１０日	真田町農業協同組合および県教育委員会文化課、町教育委員会３者による保護協議。四日市遺跡農協用地分の発掘調査実施および費用負担者について合意。
３月１６日	発掘調査実施にあたり、真田町農業協同組合と真田町教育委員会の２者による細部の打ち合せ。
３月２５日	バックホーによるトレンチ調査を開始、遺構が確認される。

4月　1日	（委託者）真田町農業協同組合　組合長　北島　鯨波夫　と（受託者）真田町長　若林　康朗　との間で発掘調査委託契約を締結する。委託金3,458,000円。
4月　6日	バックホーによる表土除去作業にかかる。
～　8日	表土除去作業終了。
4月11日	鍬入れ式を行なう。人力による遺構検出作業開始。
5月11日	測量委託について　（委託者）真田町長　若林　康朗　と（受託者）（有）写真測図研究所　杉本　幸治　との間で委託契約を締結する。委託料1,785,000円。
5月20日	現場作業、本日をもって終了。 以後、作業員4名にて遺物水洗等の整理作業を行なう。
5月22日	現地説明会を実施する。参加者20名。
5月24日	測量委託　トータルステーション遺構測量実施。
5月25日	測量委託　集石遺構の部分を手作業により実測を行なう。
5月26日	測量委託　ラジコンヘリによる空中写真撮影実施。
6月　3日	現地における作業すべて終了。器材撤収。 発掘調査終了届け等を提出。
8月　1日付	出土品が埋蔵文化財に認定され、所有権が真田町教育委員会に移管される。
9月26日	発掘調査変更委託契約を締結。委託金1,785,000円。
10月31日	委託金請求書を町から真田町農業協同組合に提出。 発掘調査報告書完成。発掘調査委託契約終了。

2　発掘調査の体制

調査団長	真田町農業協同組合組合長	北島　鯨波夫
	真田町教育委員会教育長	三井　俊男
参　与	真田町農業協同組合副参事	清水　俊治
	企画総務課長	若林　幸正
庶　務	真田町農業協同組合	岡嶋　庄平
事務局	真田町教育委員会教育次長	芳沢　孝夫
	社会教育係長	神林　信義（平成6年3月31日まで）

真田町教育委員会	社会教育係長	荒井今朝信(平成6年4月 1日から)
	社会教育係	小宮山治仁
調査主任	社会教育係	和根崎　剛
調　査　員	社会教育係	川上　麻子

3　発掘調査経費の内訳（概算）

発掘調査費総額　　5，000，000円

内　訳	金　額
発掘作業員賃金	2，400，000
測　量	1，785，000
消耗品	200，000
バックホー工事	500，000
そ の 他	115，000
合　計	5，000，000

2　遺跡周辺の環境

1　地理的環境

真田町は長野県の北東部に位置し、町の東側は群馬県嬬恋村と県境を接する。総面積は181.90㎢を有し、北東には四阿山（2332.9m）・根子岳（2128m）が連なり、町の大部分を山地が占めている。山麓の菅平高原に源を発する神川沿岸には谷平野が発達している。四阿火山群を形成する四阿山・根子岳と四日市遺跡の位置する神川右岸に分布するローム層との関係は未だ判明していない。なお、古墳時代後期の集落遺跡である境田遺跡の存在する神川左岸の下原地区には、巨大なレキを含んだローム層が広がっており、土石流などによる二次堆積のローム層である可能性がある。なお、菅平高原は夏のラグビー合宿、冬のスキーで有名である。

四日市遺跡の位置する横尾・四日市地区は、神川の堆積平坦面上にある。上田市との境界付近で神川と合流する傍陽川や洗馬川の扇状地面とも接しており、広く開けている地域である。町役場、町民グランド、体育館、真田中学校といった施設が集中し、これらの建設当時から付近一帯に遺跡が存在することが知られてはいたものの、十分な調査が行なわれていたとは言いがたく、遺跡の概要等については不明な点が多かった。平成元年度になって役場庁舎の新築に係り四日市遺跡の一部が発掘調査され、縄文時代中期及び平安時代の集落の存在が明らかになり、この発掘調査が契機となって横尾・四日市地区の遺跡の重要性が改めて認識されることとなった。なお、本遺跡は現在の集落の中心からやや南に外れた神川右岸の河岸段丘端に位置している。近年、団地造成や大規模ほ場整備事業によって開発が急速に進んでおり、埋蔵文化財保護の現状は決して良好であるとは言えない。

2　歴史的環境

真田町は真田氏発祥の地として知られる。また、群馬、松代への交通路しての役割は大きく、原始・古代においても交通の要衝として重要な場所であったと思われる。当町の歴史を考える場合にはこの点を踏まえておく必要があろう。

原始・古代を概観してみよう。菅平高原の遺跡については小原　等氏によって

早くから注目され、資料が蓄積された。小原氏の地道な研究活動に対して深く敬意を表したい。旧石器時代の遺物は菅平小中学校敷地遺跡、唐沢B遺跡等からの出土が知られている。学校敷地遺跡出土の石器は東山系文化に属するものと考えられている。また、唐沢B遺跡は神子柴型石斧を出土した遺跡として著名である。なお、四日市遺跡の位置する平野部では、旧石器時代の遺跡は発見されていないが、先述した境田遺跡から黒耀石製の槍先型尖頭器が1点出土している。ローム層上部からの単独出土で、ロームが二次堆積の可能性があるので、高地から移動してきたものである可能性が強い。

つづく縄文時代になると菅平高原の東組E遺跡、石戸山A遺跡などに草創期・早期の生活の痕跡が認められる。菅平地区では過去に何度か発掘調査が行なわれたが、押型文系土器の出土が見られ、それに伴う石器も多数見つかっている。しかし、住居址の検出には至っていない。前期になると平野部でも遺跡の数が増え、四日市遺跡で花積下層式～諸磯式併行期の資料が見つかっている。住居址も検出されており、注目される。四日市遺跡は中期終末期の加曽利E式土器・唐草文系土器の共伴する時期が最盛期で、敷石住居址がみられ、典型的な柄鏡型住居址も検出されている。該期の浅間山山麓には四日市遺跡をはじめ、小諸市の郷土遺跡、東部町の久保在家遺跡といった同時期の大きな集落が分布しており、ひとつの文化圏として捉えられる可能性を秘めている。土器様相には八ケ岳山麓に展開する曽利式土器の影響もうかがえ、興味深い。後期の遺跡は雁石遺跡が知られ、称名寺系の大深鉢や亀形土製品、土製耳飾、石棒などの出土をみた。中でも亀形土製品は墓域からの出土という点で貴重な例である。土笛としての機能が推定され、中空で腹部に穴が2つ開いている。晩期の遺跡については菅平の唐沢、陣の岩といった岩陰遺跡から土器、石器とともに骨角器及び動物遺存体の出土が知られている。また、平野部の境田遺跡からも氷式土器の深鉢の破片が出土している。

弥生時代の遺跡はキャンプサイトとして前述の岩陰遺跡と若干が知られるのみで、竪穴住居址については検出例がない。また、遺物についても岩陰遺跡を除くと、後期の箱清水式土器の破片が散在的に見られる程度であり、水稲耕作を基盤とした集落の存在は疑問である。

古墳時代集落が展開するのは後期の鬼高式期になってからである。後期円墳の典型である藤沢古墳や本原地区の多数の小円墳と時期的に一致する。近年、四日市や境田遺跡で住居址の検出例が増えている。境田遺跡では石製模造品が出土した。当時の集落規模及び経営基盤については不明であるが、耕地拡大の動向とあわせて検討課題である。

奈良・平安時代の様相については四日市や境田遺跡で平安時代の集落址がみつかっている以外は、断片的な情報しかない。しかし、おそらく平安時代になると大規模かつ長期的な集落が平野部には散在していたと思われる。四日市では墨書土器が多数出土しており、今回、鍛冶製鉄遺構が検出されたことと併せて、注目したい。

3　調査の概要

1　遺跡および調査対象地点の概観

本遺跡は神川右岸の河岸段丘上に位置し、調査対象となった地域は水田、畑として利用されていた。この場所に遺跡の存在が明らかになったのは横尾地区県営ほ場整備事業に係る試掘調査の際である。平成４年度に行なわれた試掘調査では縄文時代前期土器、石器、平安時代土器、および住居址に伴うものと推定されるカマドが検出されている。また、平成５年度には今回の調査対象地から北西に３００ｍほど離れた「四日市遺跡Ａ地区」の発掘調査が行なわれ、縄文中期終末、古墳、平安時代の遺構・遺物が出土している。このような情報から推察するに、今回の発掘対象地点においても広域かつ幾多の時代にわたる遺跡の存在が推定できた。

調査対象面積は約３，５００㎡であった。調査区の大部分は水田であったため、遺構の遺存状態はかなり悪いものと推定された。緩い傾斜地を切り土、盛り土して水田を造成したらしく、調査区北東部では耕作土直下にローム層が現われた。壁を失った住居址も検出され、多くの遺構が削平によって破壊されたことが推察できる。

2　調査の方法

四日市遺跡は以前から周知されており、過去にＡ地区で２度（平成元年度・５年度）の発掘調査が行なわれ、縄文時代中期最終末と平安時代（１０世紀）の集落址が確認された。敷石住居址（柄鏡型住居址）が発見されたり、平安時代の一括資料が検出されるなど、成果をあげた。今回の発掘箇所は４年度のトレンチ調査の際に発見され、「四日市遺跡Ｂ地区」として新たに認識された。Ｂ地区については平成６年９月からほ場整備に伴う調査が予定されており、便宜的に今回調査する農協施設用地に対して仮に「四日市遺跡Ｃ地区」という名称を与え、調査を実施することとした。今回の発掘対象地は表採調査や前回のトレンチ調査の結果から縄文時代前期と平安時代の遺構の存在が予想された。しかし、水田部分の遺構の状況が明確でなかったため、遺構の存在と土層の堆積状況を確認することが先決となった。そこで調査区全域に任意で１ｍ幅のトレンチを掘り、おおよそ

の遺跡の性格を把握したうえで面的な調査に移ることにした。当初、水田部分は遺構の存在について否定的な見方をしていたが、トレンチ調査の結果、水田部分でも遺物包含層が確認され、黒色土層（Ⅰ層）内に遺構の存在が予想されたため、急きょ調査方法について再検討を行い、調査区全域について耕作土のみを重機で取り除き、以下は人力による調査を行なうこととした。

遺構、遺物の図化、プロットには国土座標に基づいて測量基準点（ベンチマーク）を設定し、光波測定器を用いたトータルステーション測量を行なった。カマドや図化の必要な遺物については簡易遣り方を用いた。

遺構は記号化し記録、整理の便を図った。標記はアルファベット２文字を組合せ、時代に係わりなく、性格ごとに発見（認定）順に付け与えた。この標記方法は遺物の注記まで生かしたが、報告では記号化を避けた。

上記以外は、遺跡の性格に係わらない一般的な方法をとっている。

３　調査経過

発掘調査は平成６年３月２５日から６月３日まで行なった。

遺構の存在を確認するため、幅１ｍのトレンチを任意で８本設定した。３日間にわたって行い、終了後、調査方法を検討した上で面的な調査に移った。

重機による表土剥ぎ作業を行なう一方で、作業員による遺構検出作業を併行して行なった。調査区が広大なため、ある程度の遺構が見つかった段階で各遺構の調査を行い、これを繰り返した。しかし、ほとんどの遺構がローム層まで掘り込んでいないという状況のなかで、平面プランの検出が難しく、多くの遺構で壁面をとばしてしまうという失敗をした。そのため、遺構のプラン・床面を未確認のまま掘り下げてしまった可能性がある。

このような状況のなかで、時間は無情にも過ぎ去り、遺構の存在の可能性の薄い調査区北東部分の調査は断念せざるをえなかった。また、農協側のご厚意により、調査期間を若干延長させていただいたものの、すべての遺構について綿密な調査が出来たとは言えず、止むを得ず、遺物のみを取り上げて終了した遺構もある。

５月下旬に入り、遺構測量、写真撮影等を行い、６月３日現場における作業を終了した。以降、整理作業、報告書作成を行なった。

4　遺構・遺物の概観

今回の調査で縄文時代早期末頃のものとみられる蛇紋岩製の小形磨製石斧が見かっている。該期の遺構は確認されていないが、何らかの生活に関わる行為があったことが推定できよう。また、縄文時代中期の遺構、遺物が見つかり、小規模ながらも生活の痕跡があったことも窺える。だが、集落として大きく展開するのは縄文時代前期と古墳時代後期及び平安時代である。

縄文時代前期の遺構は住居址２棟と土坑１基を検出した。そのうちの住居址１棟は関山式併行のものと考えられる。遺物包含層からはおびただしい数の土器片・石器が出土している。時期的には前期がほとんどで、中期の遺物がわずかながら混じる。

弥生時代の遺構・遺物は皆無である。

つづく古墳時代については住居址と考えられる遺構が２棟確認されたが、遺物の量もきわめて少ない。土器の特徴から後期鬼高式期の住居と考えられ、Ａ地区で検出された住居址と同時期のものである。ただし該期の遺構の密度がきわめて小さく、Ａ地区およびＣ地区は集落の中心部を形成していたとは考えにくい。

平安時代については住居址８棟を数える。調査区全体に散在しており、比較的まとまった集落が経営されていたことが推定できる。また、小鍛冶遺構が１基確認されており、集落経営の面からみて興味深い資料である。また、住居址内から良好な一括資料を得ている。

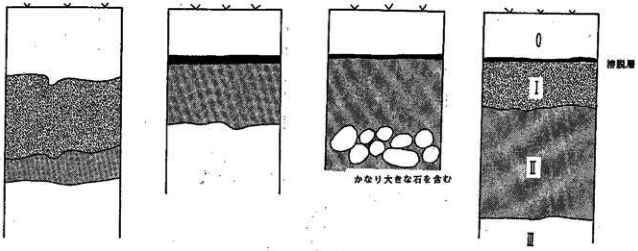
これ以後の様相については情報が少なく、詳細は不明である。ただ、調査区の東端に観音堂があったという古老の証言があり、以前その場所から耕作中に懐中にいれて持ち歩くための観音像が出土したという。「四日市」という地名のとおり、中世以後、人々の活発な往来があったことがうかがえ、周辺には馬頭観世音などが多く見られる。

5　基本層序

最も多いところで４層に分層できた。０層が表土ないし耕作土、Ⅰ層（黒色土）とⅡ層（暗褐色土）は堆積腐食土層、Ⅲ層がローム層となる。水田部分においては耕作土直下に２～３㎝程度の溶脱層が入る。場所によって異なるがⅠ層およびⅡ層は２０～３０㎝の層厚があった。調査区北端および南端ではⅡ層に人頭大のレキが含まれる。古墳・平安時代の遺構はⅠ層上面から、縄文時代の遺構はⅡ層

上面から掘り込んでいる。縄文包含層はⅠ層である。先述したように調査区内は削平によってかなり土が動いており、部分的にⅠ層を欠いているところもある。

調査区南端から自然流路の痕跡を確認した。平安時代の住居址が流路を形成するレキの上部に作られている例がみられるので、それ以前の産物であるといえよう。なお、隣接するＢ地区からもこの自然流路の一部が検出されている（調査中のＢ地区における切り合い関係から古墳時代後期よりも前のものであることが判明した）。Ⅱ層に含まれるレキはこれに関連するものである可能性がある。自然流路の中央には人頭大の大きな石が含まれるので、小川程度のものとは考えにくい。



0層	7.5YR3／4	褐色	水田耕作土・粘性あり・しまりあり
	10YR3／2	黒褐色	畑耕作土・粘性なし・しまりややあり
Ⅰ層	10YR1／2	黒	遺物包含層・粘性ややあり・しまりあり
Ⅱ層	10YR3／3	暗褐色	粘性あり・しまりあり
Ⅲ層	10YR4／6	褐色	ローム層・粘性なし・しまりあり
溶脱層	5YR4／8	赤褐色	

平安住居址フク土　10YR2／1　黒　炭化物及び焼土粒を含む・粘性あり・しまりあり・湿った感じの土

第１図　四日市遺跡Ｃ地区基本土層図

6　検出された遺構・遺物

四日市遺跡C地区で検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

［遺構］

縄文時代	住居址	2棟
	土　坑	1基
	配石遺構	1基
古墳時代	住居址	2棟
平安時代	住居址	8棟
	小鍛冶遺構	1基
	集石遺構	2基
時期不明	河川址	1条
	土　坑	7基
	配石遺構	1基

［遺物］

縄文時代	縄文土器	前期（羽状縄文系土器）～後期土器
	石　器	石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧・石皿・すり石
古墳時代	土師器	坏・小型甕
平安時代	土師器	坏・甕・埦・甑・皿・盤・手捏土器
	黒色土器	坏
	須恵器	坏・坏蓋・甕
	軟質須恵器	坏
	灰釉陶器	坏
	土製品	フイゴ羽口・土製紡錘車
	石製品	砥石
	鉄（製品）	鉄鏃・鋤・鉄鎌・不明鉄製品・鉄滓
	貨　幣	種別不明

4　調査の結果

今回の発掘調査では住居址　（縄文前期２、古墳２、平安８）、土坑９（縄文前期１、時期不明８）、小鍛冶遺構１基、集石遺構２基（平安１、時期不明１）、配石遺構２（縄文中期１、時期不明１）を確認した。出土した遺物はコンテナ箱２０箱相当にのぼる。以下、時代ごとに調査の結果について記述する。

1　縄文時代

今回の調査で確認した縄文時代の遺構は、前期については住居址２（関山式期１・長野県史編年東信第Ⅰ期１〔以下東信第Ⅰ期と略す〕）土坑１（東信第Ⅰ期）、中期は配石遺構１基である。

関山式期の住居址は一辺が４ｍ×３ｍ程の長方形プランを呈し、中央部に炉の痕跡を認める。住居内ピットは６基のみ確認できた。住居内には多量の石が投げ込まれている。土器および石器の出土が多く（磨製石斧、石匙２、石鏃、石皿２、すり石等）、当時の道具のセットを復元できる好資料となろう。

東信第Ⅰ期の住居は径３ｍほどの円形プランを呈する。ピット８基を確認、うち最も大きな１基から羽状縄文が施文された深鉢が倒置した形で検出された。

土坑には羽状縄文の大破片が埋設されていた。それ以外には特記できる遺物は出土していない。

中期の遺構は土器の埋設された配石が検出されたのみである。埋設土器は底部を欠失し、口縁部も失っているが割れずに形の残っている個体である。配石は一辺が２０～３０㎝の平石を７０×３０㎝程の長方形に組んだもので、長軸は北西方向を向き中央よりやや北西寄りに土器が埋設してあった。遺構の性格については今のところ検討中であるが、墓壙である可能性は少ないと思われ、水田造成時の攪乱により、床を欠失した住居址である可能性が高い。しかし、焼土が検出されなかったことや、埋設されていた土器が炉体土器とは考えにくい大きさである点など、検討すべき材料が多く、ここでは断定は避けたい。

縄文時代の遺構は以上であるが、出土遺物が多量であることや、紙面や時間の制約上、今回の報告では縄文時代遺構の報告は割愛させていただきたい。これについての批判は甘んじて受けたいが、平成７年度に発掘調査する予定の隣接区（

D地区）の報告書「四日市遺跡Ⅲ」で遺構・遺物実測図等紹介したいと考えている。

2 古 墳 時 代

古墳時代のものと推定される遺構は住居址が２棟検出された。うち１棟からは石組みの大型の煙道が出土した。両住居址は規模・構造に違いはあるものの後期鬼高式期の所産であろうと思われる。北西に３００ｍ程離れたＡ地区でも同時期の住居址が２棟確認されており、関連がうかがえる。

① １３ 号 住 居 址

カマドと思われる石組みを検出したのみである。遺構であることに気付くのが遅れ、平面プランはまったく確認できなかった。しかし、カマドらしい石組み、および周辺から完形土器を検出したことにより、住居址と認定した。出土した土器は坏２点を数える。また、取り上げた時は遺構外としたが、完形の古墳時代の小型壺甕が１点出土した。出土地点が近いため、おそらくこの遺構に伴うものと推定される。住居址の時期は土器の特徴から古墳時代後期鬼高式期である。

② １５ 号 住 居 址

石組みの煙道が検出された大型の住居址である。

主軸長７ｍ、副軸長６ｍを数える。床面は全面が堅緻面となっていた。壁高は２０㎝を計る。周溝は確認できなかった。

カマドは北向きに位置し、主軸方向と若干ずれて作られている。立石と粘土構築材の一部を確認し、焼土とにぶい黄褐色の灰層がみられた。煙道は長軸が３．５ｍあり、平らな石を側溝状に立てて作られている。煙道については本来は石の蓋がついていたと考えられるが、水田耕作土直下から検出されたため、耕作によって失われたと思われる。また、トレンチ調査の際に一部を破壊した。

ピットは２つが確認されたが、後世のカクランによるものと考えたい。

遺物は少なく、床面から甕１点、小型甕１点、覆土中から鉢１点を検出した。

3 平安時代

平安時代の遺構は住居址８棟、小鍛冶遺構１基、集石遺構１基を検出した。遺構の覆土は一様に粘気の強い湿った感じの黒色土が堆積していた。住居址については規模、構造に若干の差異はあるものの、概ね１０世紀代の初産であると考えている。ただし、集石遺構についてはそれらよりも若干の古い年代を与えたいと思う。昨年調査したＡ地区からも１２棟の平安時代の住居址が検出されているが、一連の集落と考えたい。

今回は紙面や時間の制約上、主だった遺構の報告のみにとどめ、残りはのちの機会に改めて報告することとしたい。

① ４号住居址

比較的遺物がまとまって出土した遺構である。壁面の検出が遅れ、一部で壁を破壊してしまった。床面積３ｍ×３ｍ程度の住居が想定される。壁高は最も残存していた部分で２０㎝を計る。床面は全体の２／３が堅緻面となっていた。周溝は確認できなかった。

付属施設はカマドとピット３基を確認した。カマドは東側に位置し、ソデを構築していたと推定される立石と焼土を確認。粘土と煙道は検出できなかった。ピットNo.１は鍵穴状を呈し、底部から坏の破片が１点出土した。

遺物は坏１９点（土師器３、黒色土器１２、軟質須恵器４）、皿１点、椀１点、甕１点、小型甕１点を検出した。うち坏の１点は墨書土器で判読不能であるが文字が１字書かれている。この住居址出土の坏の底部は回転糸切りの後、手持ちヘラ削りによって底部及びその周辺を調整する例がおおい。

また、カマド内から鉄製刀子の破片が１点出土している。

② １７号住居址

焼失住居址と思われ、完形土器が多数出土している。

一部をトレンチ調査の際に破壊してしまったが、一辺３．５ｍ程度の方形プランを想定できる。床面はほぼ全面が堅緻面となっており、炭化材と焼土が散在していた。壁高は４０㎝を計る。周溝は確認できなかった。

カマドは東側に位置し、立石と焼土を確認した。粘土構築材および煙道は検出できなかった。ピットは３基、うち１基の底部から坏が１点出土した。

遺物は坏１０点（土師器８、黒色土器２）、皿３点、椀１点、鉢１点、盤２点が出土した。底部に回転糸切り痕を残すものが多い。坏のうち１点は胴部が直線的に立ち上がる器形の特徴的なものである。

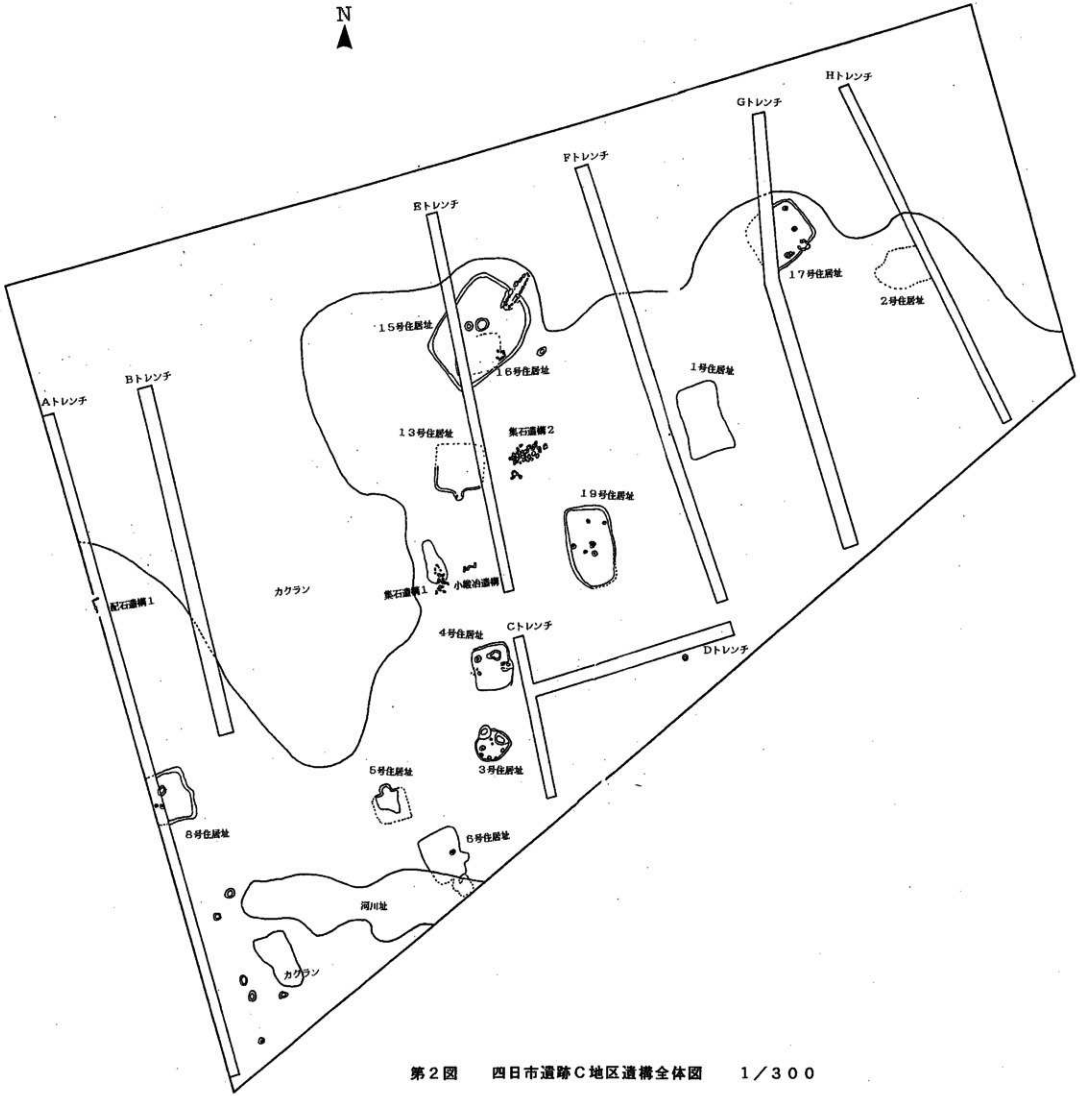
また、カマド内から鉄鏃が１点検出された。

③ 小 鍛 冶 遺 構

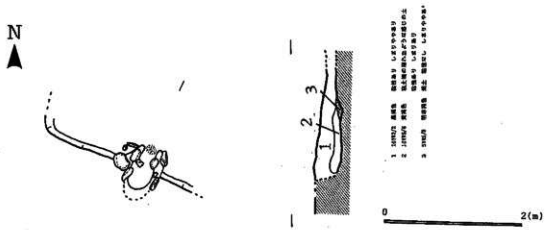
鍛冶炉と推定される遺構が１基検出された。確認された部分は炉壁の一部と着裝されたままのフイゴの羽口２本である。周辺から鉄滓が多量に見つかっているが、球状鉄滓ではないので鍛冶炉と推定した。また、鉄滓中に木炭と推定される植物の組織が混入しているものもあった。時期決定のできる遺物はないが、炉の形状、中世の生活址が検出されていないことなどから平安時代のものと考えたい。なお、この遺構から３ｍほど離れた地点から鉄鏃が２点まとまって出土しており、関連が注目される。また、集石遺構２としたものが近接して存在しており、集石の一部に火を受けた痕跡があることや、周囲３～４ｍの範囲にわたって焼土が検出されたことを考えると、小鍛冶遺構との関連もあるかもしれない。

④ 集 石 遺 構 ３

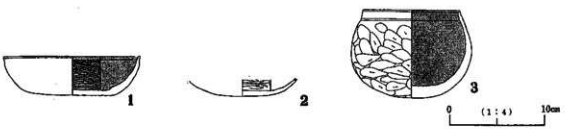
人頭大の自然石を楕円形に集めて作られている。穴を掘って投棄したという感じはなく、石を小高く積んでケルン状になっていたと推定できる。周辺から須恵器坏３点が検出された。土師器の破片は皆無であった。遺物の時期については、他の住居址の遺物よりも若干古い年代を与えてもよさそうである。この遺構の性格については発掘結果からは何とも言えないが、須恵器坏の底部のみを残し、意図的に高台部分と口縁部分を欠失させたものが、集石の傍らに置かれた状態で出土しており、興味深い。また、須恵器のみの出土というのも考えさせられる。また、集石のひとつに加工がみられた。祭祀的な性格を考えるのは性急であろうか。



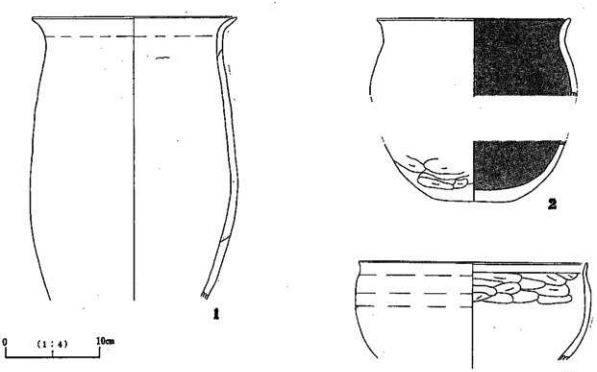
第２図　四日市遺跡Ｃ地区遺構全体図　１／３００



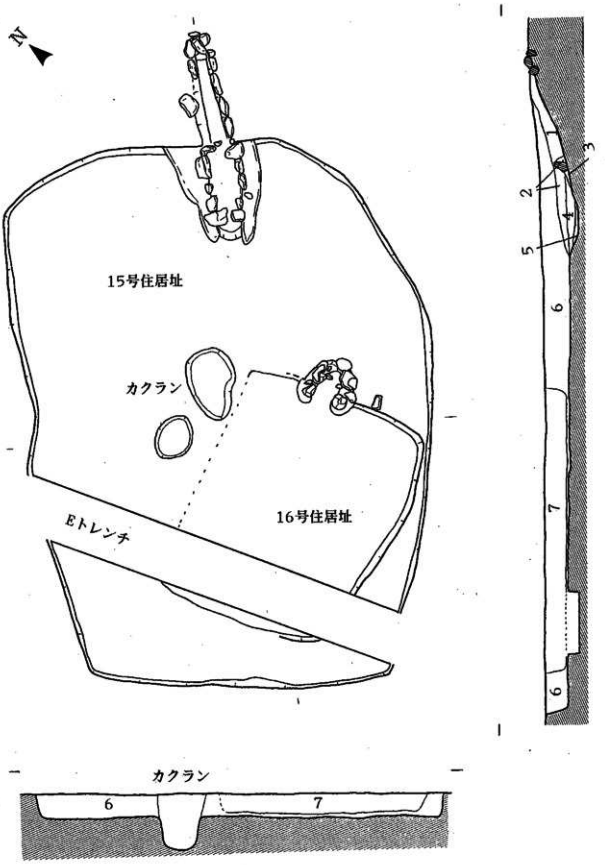
第３図　　１３号住居址実測図



第４図　　１３号住居址出土遺物実測図



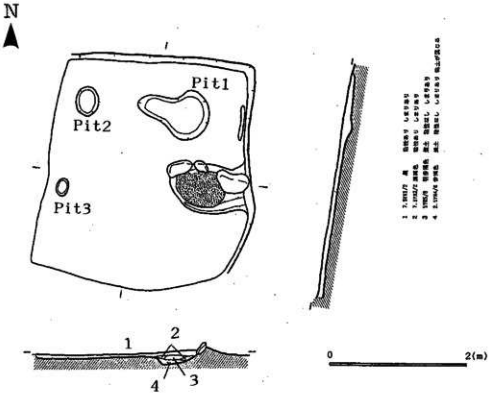
第５図　　１５号住居址出土遺物実測図



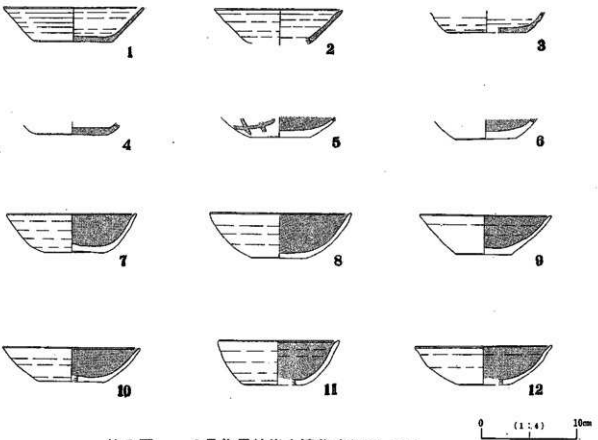
1 7.5YR1/2 黒褐色　粘性あり　しまりあり　黒土粒を含む
2 2.5YR3/3 暗　粘性なし　しまりなし　さらさらしている
3 2.5YR4/3 褐色　粘性なし　しまりなし　径3mm程度の黒土粒を含む
4 2.5YR4/8 明赤褐色　粘土　粘性なし　しまりなし　焼を含みもろいしている
5 10YR3/3 褐褐色　粘性なし　しまりややあり　砂質
6 2.5YR1/2 黒褐色　粘性あり　しまりあり
7 7.5YR1/2 黒　粘性あり　しまりあり

0　2(

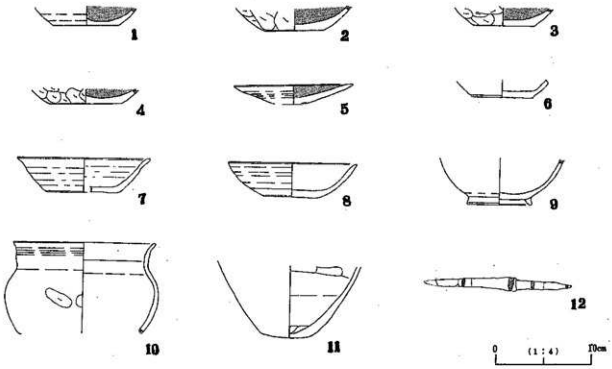
第６図　　１５号住居址実測図



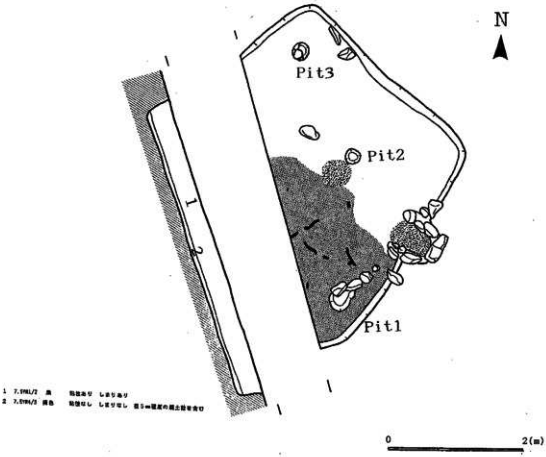
第７図　　４号住居址実測図



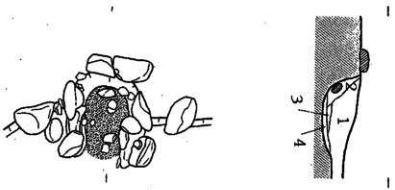
第８図　　４号住居址出土遺物実測図（１）



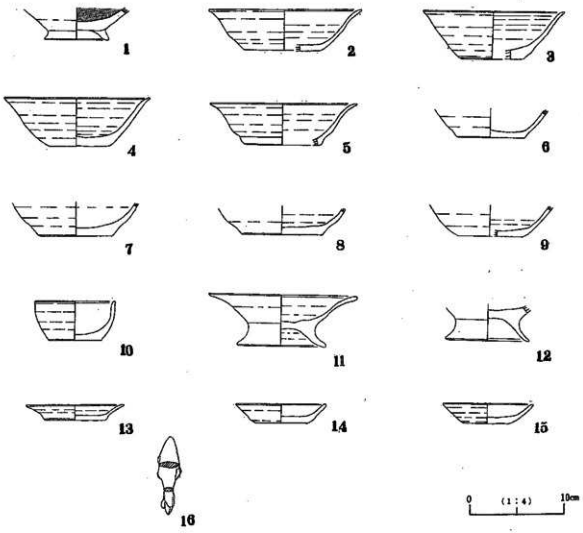
第９図　　４号住居址出土遺物実測図（２）



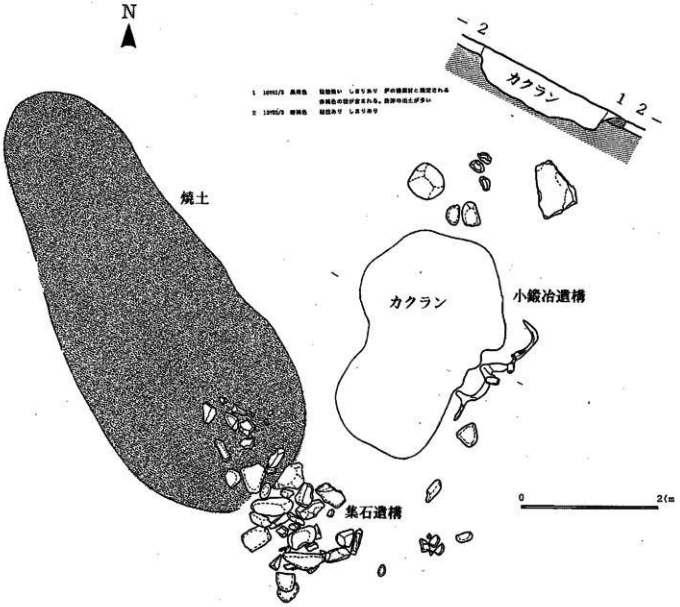
第１０図　　１７号住居址実測図



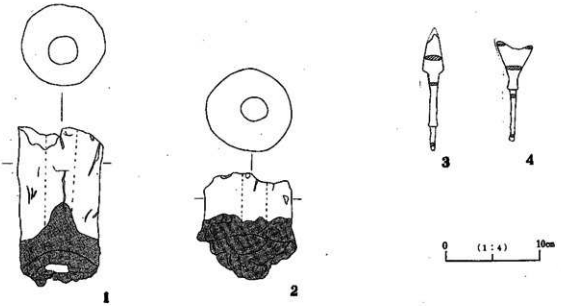
第１１図　　１７号住居址カマド実測図　(S=1/30)



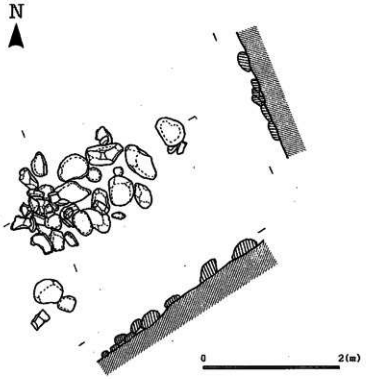
第１２図　　１７号住居址出土遺物実測図



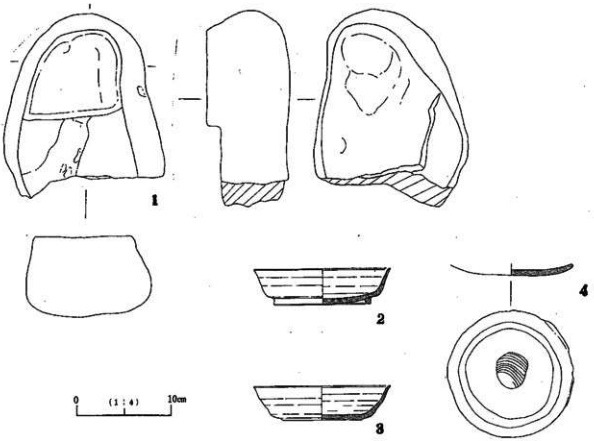
第１３図　小鍛冶遺構・集石遺構１実測図



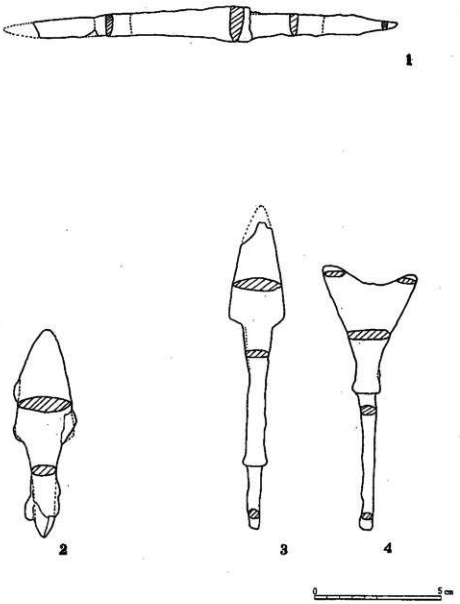
第１４図　小鍛冶遺構出土遺物実測図



第１５図　集石遺構２実測図



第１６図　集石遺構２出土遺物実測図



第１７図　　四日市遺跡Ｃ地区出土鉄製品集成図　(S=2/3)

遺構一覧表

① 竪穴住居址

住居址名	平面プラン	主軸方向	付属施設の状況	出土遺物	備考
1号住居址 平安	不明	北西	不明	土師器（坏・皿） 出土遺物は少ない	床面と推定される堅緻面と炭化材が確認された。壁は削平によって失われた。そのため遺物の量も少ない。炭化材と焼土が広がっており、焼失住居と考えられる。
2号住居址 平安	不明	不明	不明	土師器（坏） 出土遺物は少ない	床面と推定される堅緻面を確認したのみである。壁は削平によって失われた。そのため遺物の量も少ない。
3号住居址 縄文前期	円形		8基のピットを伴い、大型の1基から羽状縄文系の深鉢の完形品が出土。	羽状縄文系の深鉢 石器（石鏃）	炉址の検出はできなかったが、床面と壁を確認した。土坑1によって切られる。
4号住居址 平安	方形	北西	カマドの袖石と焼土、ピット4基を確認。	土師器・黒色土器 ・軟質須恵器 鉄製刀子	床は堅緻面となっている。
5号住居址 平安	不明	不明	カマドの袖石を確認。カマド内の焼土はごくわずかであった。	土師器・黒色土器 鉄製鎌	削平によって大部分が失われているが、カマド部分とその周辺の床、壁が残る。
6号住居址	不明	不明	ピット1基を確認。	出土遺物はほとんどなし。	住居址であるか決め手がないが、方形に堅緻面が広がっていた。削平によって壁を失った住居址の可能性がある。
7号住居址 平安	不明	不明	不明 2ケ所に焼土がみられた。	焼土内から黒色土器坏の破片 土師器甕	床と考えられる面を検出したが、壁は不明。削平によって壁を失ったと考える。6号住居址とした堅緻面に切られる。河川址の縁辺部のレキの上に床面が形成されている。
8号住居址 平安	方形	北東	カマドの焼土、ピット3基を確認。	※遺物盗難。土師器の甕、坏の破片がカマド・床面にみられる。	床は堅緻面となっている。一部調査区外に広がる。

住居址名	平面プラン	主軸方向	付属施設の状況	出土遺物	備　　考
１３号住居址 古墳後期	不明	不明	カマドらしい石組みと焼土が確認された。	土師器坏、小型甕	壁、床面ともに不明。土質の違いに気付かずにとばしてしまったと思われる。
１５号住居址 古墳後期	方形	北東	カマドと煙道の石組みと焼土が確認された。	土師器甕、小型甕、鉢	床は堅緻面となっている。１６号住居址によって切られる。
１６号住居址 平安	方形	北東	カマドと焼土、ピット２基が確認された。	土師器、黒色土器 鉄製鎌	床が堅緻面となっており、１５号住居址と床面レベルがほぼ同じであるため、床と壁の一部が不明。
１７号住居址 平安	方形	東	カマドの袖石と焼土、ピット３基が確認された。	土師器、黒色土器 鉄鏃	床面、壁を確認。炭化材と焼土が広がっており、焼失住居と考えられる。一部トレンチ調査で破壊。
１９号住居址 縄文前期	隅丸長方形	北西	炉址とわずかな焼土、ピット５基が確認された。	関山式併行期の土器　石器（石鏃・石匙・石皿・すり石等）	床面、壁を確認。中央部に集石が見られた。

② その他の遺構

遺構名	平面プラン	出土遺物	備　　考
小鍛冶遺構	―	フイゴ羽口 鉄滓	炉壁の一部を確認
集石遺構２	―	土師器	火を受けた痕跡があり、周囲に焼土が広がっている。小鍛冶遺構に近接。
集石遺構３ 平安	―	須恵器坏	ケルン状に石を積んだもの。

遺構名	平面プラン	出土遺物	備　　考
配石遺構1 縄文中期	不明	縄文中期深鉢	平らな石を長方形に並べたもので、住居内施設である可能性があるが、床面と思われる部分が一部残っている他は、壁面等は不明である。焼土、炭化物等はみられない。
配石遺構2 不明	不明	なし	平らな石を長方形に並べたものであるが、焼土、炭化物等はみられず、遺物も土器片すら検出しえなかった。そのため時期決定は不可能である。
土坑1 （縄文）	楕円形	縄文前期土器片（フク土）黒耀石片（フク土）	3号住居址を切っている。縄文前期土器片のみの出土であるため、ある程度遺構の時期は決定されよう。
土坑2 縄文	円形	縄文前期土器	縄文前期深鉢の大破片が埋設されていた。
土坑3	円形	土師器破片（フク土） 黒耀石片（フク土）	時期決定不可能
土坑4	円形	土師器破片（フク土）	時期決定不可能
土坑5	円形	土師器破片（フク土） 黒耀石片（フク土）	時期決定不可能
土坑6	円形	土師器破片（フク土）	時期決定不可能
土坑7	円形	土師器破片（フク土）	時期決定不可能
土坑8	円形	土師器破片（フク土）	時期決定不可能
土坑9	円形	土師器破片（フク土） 黒耀石片（フク土）	時期決定不可能

土 器 観 察 表

番号	出土地点	器種	種 類	色 調	胎 土	焼成	製作技法の特徴	残存率
4-1	13号住居址	坏E	土師器	7.5YR6/6 橙	黒色粒子を含む	良好	底部ヘラ削り　内面黒色処理・横ヘラミガキ	1
2	〃	坏E	土師器	7.5YR6/6 橙	白雲母・茶色粒子を含む	良好	底部ヘラ削り　内面横ヘラミガキ	1/3
3	〃	鉢	土師器	7.5YR6/6 橙	白雲母をわずかに含む	良好	体部ヘラ削り　口縁部ナデ　内面黒色処理	1
5-1	15号住居址	甕B	土師器	10YR6/4 にぶい黄橙	砂粒・白雲母を含む	良好	ハケ調整	2/3
2	〃	小型甕A	土師器	5YR6/6 橙	緻密な胎土	良好	ナデ一部ミガキ　内面ミガキ	2/3
3	〃	鉢A	土師器	7.5YR6/6 橙	大きな砂粒を含む	良好	ハケ調整　内面上部ヘラ削り	2/3
8-1	4号住居址	坏A	軟質須恵器	10YR6/2 灰黄褐色	黒色粒子を含む	良好	ロクロナデ調整	2/3
2	〃	坏A	軟質須恵器	10YR6/2 灰黄褐色	黒色粒子を含む	良好	ロクロナデ調整	1/5
3	〃	坏A	軟質須恵器	10YR7/4 にぶい黄橙	黒色粒子を含む	良好	底部回転糸切　ロクロ成形痕を残す	1/5
4	〃	坏A	軟質須恵器	10YR6/2 灰黄褐色		良好	底部回転糸切	1/4
5	〃	坏A	黒色土器A	5YR5/6 明赤褐色	白雲母・茶色粒子を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　※墨書土器	1/3
6	〃	坏A	黒色土器A	7.5YR6/6 橙	白雲母を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り	1/4
7	〃	坏A	黒色土器A	5YR5/6 明赤褐色	白い砂粒を含む	良好	底部回転糸切　内面縦ヘラミガキ	1
8	〃	坏A	黒色土器A	10YR6/4 にぶい黄橙	白雲母を含む	良好	底部ヘラ切？　内面縦ヘラミガキ	1/2
9	〃	坏A	黒色土器A	10YR6/6 明黄褐色	白い砂粒を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　内面横ヘラミガキ	1
10	〃	坏A	黒色土器A	10YR6/6 明黄褐色	白い砂粒をわずかに含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　内面縦ヘラミガキ	1/4

番号	出土地点	器種	種　類	色　調	胎　土	焼成	製作技法の特徴	残存率
8-11	〃	坏A	黒色土器A	10YR6/6　明黄褐色	白い砂粒をわずかに含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　内面縦ヘラミガキ	1/3
12	〃	坏A	黒色土器A	5YR6/6　橙	白雲母をわずかに含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削　内面縦横ヘラミガキ	1/3
9- 1	〃	坏A	黒色土器A	10YR6/6　明黄褐色	白い砂粒をわずかに含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　内面縦ヘラミガキ	1/5
2	〃	坏A	黒色土器A	10YR6/6　明黄褐色	白雲母を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　内面横ヘラミガキ	1/3
3	〃	坏A	黒色土器A	10YR6/4　にぶい黄橙	白雲母をわずかに含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り	1/4
4	〃	坏A	黒色土器A	7.5YR6/6　橙	白い砂粒を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り	1/3
5	〃	皿B	黒色土器A	2.5YR5/6　明赤褐色	白雲母を含む	良好	ロクロナデ調整	1
6	〃	坏A	土師器	2.5YR5/6　明赤褐色	緻密な胎土	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　内面ヘラミガキ	1/4
7	〃	坏A	土師器	10YR7/4　にぶい黄橙	黒色粒子を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り	1/4
8	〃	坏A	土師器	7.5YR6/6　橙	白雲母をごくわずか含む	良好	底部回転糸切　内面丁寧なヘラミガキ	1/3
9	〃	埦	土師器	2.5YR5/6　明赤褐色	緻密で硬質	良好	内外面丁寧なヘラミガキ	1/3
10	〃	甕B	土師器	10YR7/4　にぶい黄橙	白雲母を含む	良好	ハケ調整	1/8
11	〃	小型甕D	土師器	7.5YR6/6　橙	砂粒をわずかに含む	良好	頸部にロクロナデを残す　器壁薄い	1/8
12	〃	―	刀子	―	鉄製	―		1
12- 1	17号住居址	埦	黒色土器A	7.5YR6/6　橙	白雲母を含む	良好	外部にタール状の付着物あり	1/4
2	〃	坏A	土師器	10YR6/6　明黄褐色	茶色粒子を含む	良好	底部回転糸切　内面ロクロナデ	1/5
3	〃	坏A	土師器	10YR6/4　にぶい黄橙	白雲母を含む	良好	底部回転糸切	1/4
4	〃	坏A	土師器	2.5YR5/6　明赤褐色	白い砂粒をわずかに含む	良好	底部回転糸切	2/3

番号	出土地点	器種	種　類	色　調	胎　土	焼成	製作技法の特徴	残存率
12- 5	〃	坏A	土師器	10YR6/6　明黄褐色	白雲母を含む	良好	底部回転糸切　内面ロクロナデ	1/3
6	〃	坏A	土師器	10YR6/6　明黄褐色	白雲母を含む	良好	底部回転糸切　内面ロクロナデ	1/4
7	〃	坏A	土師器	10YR6/4　にぶい黄褐	白雲母を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り	1/4
8	〃	鉢A	土師器	10YR6/6　明黄褐色	茶色粒子を含む	良好	底部回転糸切	1/4
9	〃	坏A	土師器	10YR6/6　明黄褐色	茶色粒子を含む	良好	底部回転糸切→ヘラ削り	1/6
10	〃	坏C	土師器	2.5YR3/3　暗赤褐色	白雲母を含む緻密	良好	底部回転糸切→ヘラ削り　体部下端ヘラ削り 体部上端ヘラミガキ　内面ロクロナデ残り、 ミガキなし	1
11	〃	盤B	土師器	10YR7/6　明黄褐色	白い砂粒を含む	良好	内外面ロクロナデ	2/3
12	〃	盤B	土師器	10YR6/6　明黄褐色	茶色粒子を含む	良好		1/3
13	〃	Ⅲ A	土師器	7.5YR6/6　橙	白雲母を含む	良好	底部回転糸切	3/4
14	〃	Ⅲ A	土師器	10YR6/6　明黄褐色	白雲母を含む	良好	底部回転糸切	2/3
15	〃	Ⅲ A	土師器	7.5YR7/6　橙	茶色粒子を含む	良好	底部回転糸切	1
16	〃	—	鉄鏃	—	鉄製	—		1
14- 1	小鍛冶遺構	—	フイゴ羽口	5YR6/8　橙	大きな砂粒を多く含む	—	鉄滓の付着あり	-
2	〃	—	フイゴ羽口	5YR6/7　橙	大きな砂粒を多く含む	—	鉄滓の付着あり	-
3	遺構外	—	鉄鏃	—	—	—		1
4	〃	—	鉄鏃	—	—	—		1

番号	出土地点	器種	種　類	色　調	胎　土	焼成	製作技法の特徴	残存率
16-1	集石遺構2	―	石	―	―	―		1
2	〃	坏B	須恵器	2.5Y6/1　黄灰	茶色粒子を含む	良好	ロクロナデ	1/3
3	〃	坏A	軟質須恵器	2.5Y6/2　灰黄	白・黒色粒子を含む	良好	底部回転糸切　ロクロナデ　黒斑あり	1/2
4	〃	坏B	須恵器	5PB5/1　青灰	黒色粒子を含む	良好	底部回転糸切　ロクロナデ	1/2

① 土器の器種・種類の分類は、小平和夫氏の分類方法によっている。
小平和夫　1990「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1 総論編』　長野県埋蔵文化財センター
② 遺物の色調については『新版　標準土色帖　1993年版』に対応する。
農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所　1993　『新版　標準土色帖　1993年版』

5　成果と課題

各時代の概観

1　縄文時代

今回の検出資料のなかで最も注目されるものは、１９号住居址出土資料である。前期関山式期の住居址出土資料は当地域では貴重な資料である。また、この住居址から数個体の土器と数種の石器のセットが出土し、一括資料として該期千曲川流域の研究にとって好資料となることを期待している。今回は紹介できないが、機会をみて必ず紹介することを約束したい。

2　古墳時代

今回検出された住居址を加えると四日市遺跡ではこれまでに４棟の古墳時代住居址が確認されたことになる。過去、Ａ地区において後期鬼高式期の住居址が２棟検出されており、今回も同時期の住居址であることから住居址は散在的ではあるが面積としては大きな集落の存在が予想できる。Ａ地区とＣ地区が集落の縁辺部だとすると中央部は町用地（平成６～７年度発掘予定）周辺に求めることが出来るかもしれない。余談であるが、隣接するＢ地区において古墳時代の住居址が現在２棟確認されている（平成７年報告予定）。１棟は鬼高式期の住居址で石組みの短い煙道をもつ。もう１棟はそれよりも若干古い年代が与えられる。今回確認された大きめの住居址から検出された石組みの大型の煙道については、現在整理作業中の境田遺跡でも２基検出されている。該期の大型の石組みの煙道は真田町周辺での検出例を知らない。両遺跡の例は共に平らな安山岩を使用し、石の蓋があったという点で一致している。太郎山を隔てた上田市の宮平遺跡でも古墳時代後期の住居址から、四日市遺跡の例よりも若干小型で砂岩を用いた石組みの煙道が検出されているという（県埋文センター町田勝則氏のご教示による）。比較検討は以後の課題であるが、集団あるいは集落の領域といった点で興味深い。当町の事例のみで考えるならば、古墳時代後期には神川を挟んだ両岸に住居づくりに関して同じ手法を用いる集団が存在していたことがうかがえ、該期の集落構成

を考える上で貴重な資料となろう。

今後、集落の検討を含めて、住居址の構造（煙道）等について資料の蓄積を待って検討していきたいと考えている。

3 平 安 時 代

出土した土器類を検討した結果、平安時代の集落に概ね１０世紀代という年代を与えた。土師器および黒色土器の出土が多いが、他に須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器がみられる。住居址出土土器をみると、土師器の割合が多く須恵器を伴わない住居址と、黒色土器が多く軟質須恵器が伴う住居址があり、時期差が認められる。このことから長期的な集落の存在が予想できる。

今回は１０数基の遺構を検出したが、なかでも小鍛冶遺構の検出は重要であろう。炉の形状等から平安時代の遺構であると考えている。小鍛冶遺構は集落内で鉄製品の生産が行なわれていた動かしがたい証拠であり、この地域においても、該期に鉄の加工技術が普及していたことがうかがえる。こういった鍛冶関連遺構は集落の縁辺部に位置する例が多いとされ、今回の例も同様のことが言えるかもしれない。今後の調査の結果を待ちたい。これまでに四日市遺跡では今回の例も含めて平安時代の鉄製品が数点（鎌１、紡錘車１、かすがい１、鉄鏃４など）出土している。これらが全て集落内で生産されたのかどうかは不明ではあるが、生業に関連した多種多様の製品がみられることは興味深い。

また、集石遺構については、その性格等の検討が必要であるが、出土資料は当町の既出資料の中では平安時代最古段階の編年体系に組み込める資料であり、注目されよう。

住居址は全部で８棟が確認されたが、壁および床面を失った住居址や住居址と推定される遺構が多く確認された。遺跡の立地する段丘が南に緩い傾斜地となっているため、水田造成の際に削平されたらしい。そのため、今回確認された遺構の数が必ずしも当時の集落景観を復元し得るものではないと考える。今後、隣接するＢ地区およびＤ地区の調査を控えているが、その結果を待って平安時代の集落の検討を行ないたい。

おわりに

今回の発掘調査は真田町農業協同組合の施設建設が契機となって行なわれた。折しも担当者が着任して１１ケ月目、県営ほ場整備事業の発掘調査が始まり、わが真田町も大規模発掘調査の時代に突入した時期に緊急発掘調査として行なわれたものである。そのため、今回の発掘調査ではその方法や運営について試行錯誤がつづいた。まず、当町において初の民間の事業者負担の発掘調査であった点である。開発事業者が埋蔵文化財保護にどこまで理解を示してくれるかがこの種の発掘が抱える一番の問題であろう。幸いにも今回、真田町農業協同組合の全面的な協力、バックアップがあり、調査を無事終えることが出来た。この場をお借りして深く感謝したい。

つぎに担当者サイドの問題が挙げられる。今年度、この四日市遺跡Ｃ地区を含め、４つの現場、総面積20,000㎡の発掘が予定されている。そのためもあって各遺跡の調査に十分な時間が取れないことは自明の理である。なんとかならないものだろうかと思いながらも、どうにも好転しない状況になかばあきらめかけていることも事実である。また、大変恥ずかしい話ではあるが、管理の不手際で発掘現場で土器の盗難にあった。出た遺物はその日のうちに取り上げるという原則を徹底すると共に、埋蔵文化財の重要性を理解してもらう努力を怠ってはならないと感じた。

しかし、今回の調査で明らかになったことも多く、その点では成果があったと自負している。紙面・時間の制約から縄文時代の報告については次の機会とすることをお許し願いたい。担当者不慣れのため、十分な報告とならなかったことをお詫びするとともに、日頃叱咤激励してくださる先輩方に感謝申し上げて、この四日市遺跡Ｃ地区発掘調査の一応の終了をみたい。

今回の発掘調査ではたくさんの方々のご理解とご協力をいただきました。真田町農業協同組合におかれましては、組合長の北島鯨波夫氏の埋蔵文化財に対する深いご理解をいただき、発掘調査を無事、終了することが出来ました。また、副参事の清水俊治氏、企画総務課長の若林幸正氏には調査の運営についてご指導、

ご協力をいただきました。今回の調査例は周辺市町村のなかでも例を見ないものであります。こころより御礼申し上げます。

また、現場においては、作業員の統括、物資の調達、庶務について岡嶋庄平氏にご協力いただきました。おかげで調査担当者の負担はかなり軽減されました。また、氏名を列記できませんが、お忙しい春先に現場まで足繁く通ってくださった作業員の方々がいらっしゃいます。発掘調査は開発の一助を担うという陰の部分と、学習の場であるという陽の部分があると思います。「楽しかったよ」というある作業員さんの言葉、肝に命じて精進したいと思います。ほんとうにありがとうございました。

写 真 図 版

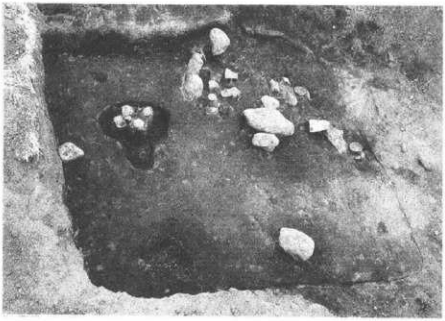
四日市遺跡C地区全景

バックホーによる表土除去作業

空中写真用ラジコンヘリ

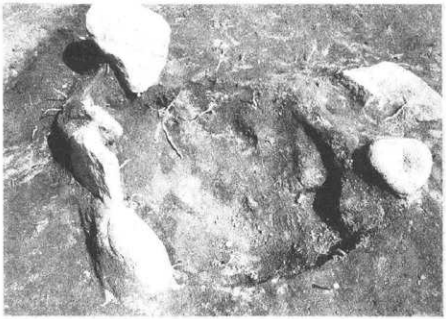
3号住居址（縄文前期）完掘状況（東から）

3号住居址羽状縄文系深鉢出土状況



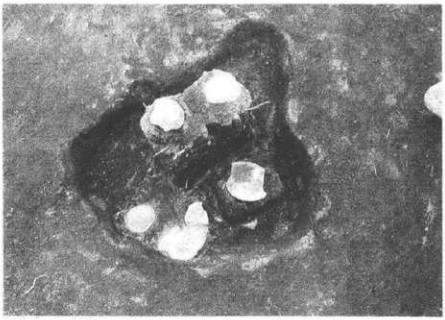
4号住居址（平安）土器出土状況（西から）

4号住居址カマド土器出土状況（西から）

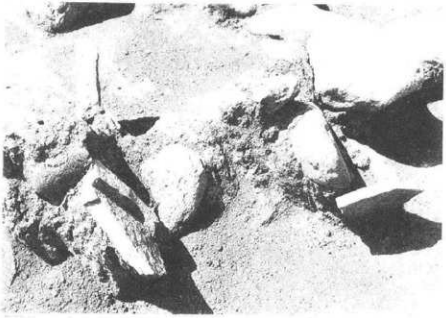


4号住居址カマド完掘状況（西から）

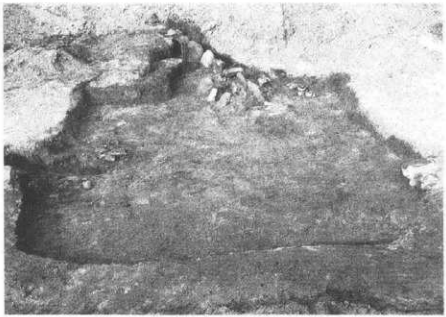
4号住居址黒色土器出土状況



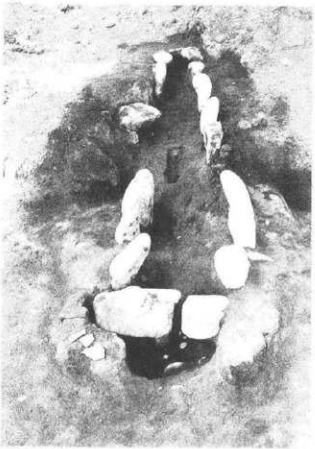
４号住居址ピット１土器出土状況



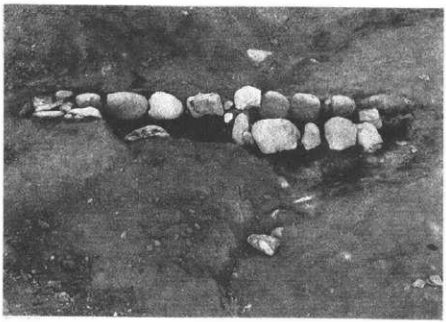
１３号住居址（古墳）カマド確認時



１５号住居址（古墳）完掘状況（南から）



１５号住居址カマド及び煙道（手前がカマド）

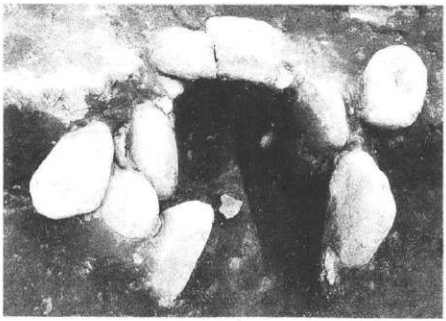


１５号住居址カマド及び煙道（側面）

１５号住居址甕出土状況

１７号住居址（平安）完掘状況（北から）

同カマド鉄鏃出土状況

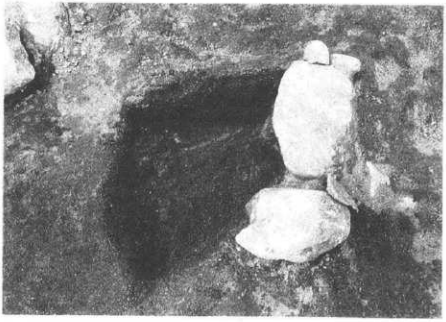


１７号住居址カマド土器出土状況

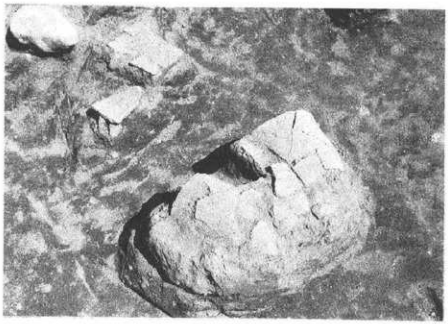
１７号住居址第12層-10土器出土状況

１７号住居址土器及び炭化材出土状況

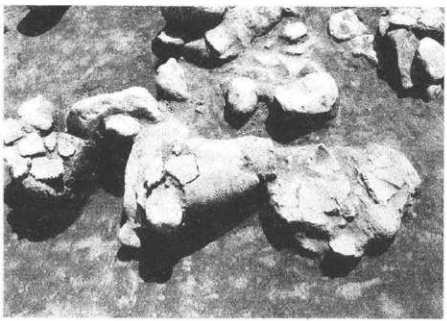
１９号住居址（縄文前期）完掘状況（東から）



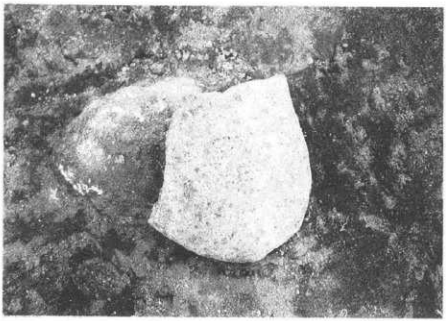
１９号住居址炉址



１９号住居址土器集中部出土状況



１９号住居址羽状縄文系土器出土状況



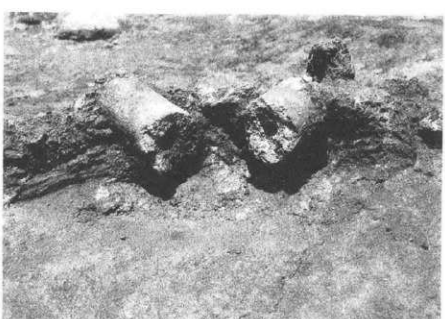
１９号住居址石皿出土状況

１９号住居址石皿出土状況

配石遺構１（縄文中期）検出状況（東から）

配石遺構１土器出土状況

小鍛冶遺構（平安）検出状況（東から）



小鍛冶遺構フイゴ羽口出土状況

集石遺構（平安）検出状況（西から）

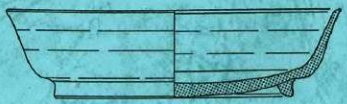
河川址検出状況

報告書抄録

ふりがな	よっかいちいせきCちく
書　名	四日市遺跡C地区
副書名	真田町農業協同組合農機・オートセンター建設に係る緊急発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	真田町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	和根崎　剛
編集機関	真田町教育委員会
所在地	長野県小県郡真田町大字長7199-1
発行年月日	1994年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よっかいち　いせき 四日市遺跡 ちく C地区	ながのけんちいさがたぐん 長野県小県郡 さなだまちおおあざ　おさ 真田町大字長 あざ　よっかいち 字四日市	—			1994年 3月25日～ 1994年 6月3日	3,500㎡	真田町農協施設建設に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四日市遺跡 C地区	集落址	縄文前期～中期 古墳後期 平安	竪穴住居址　12 土坑　9 集石遺構　2 小鍛冶遺構　1 配石遺構　2 自然流路　1	縄文土器 　前期～後期 打製石斧 石鏃・石皿 石匙・磨石 磨製石斧 土師器 黒色土器 須恵器 灰釉陶器 フイゴ羽口 砥石・鉄鏃 土製紡錘車	千曲川流域では類例の少ない縄文時代関山式期の集落址 古墳時代住居址の大型の煙道 平安時代の小鍛冶遺構



四日市遺跡C地区
－真田町農業協同組合農機・オートセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書－

発行日　平成6年10月31日
編集発行　真田町教育委員会
〒386-01
長野県小県郡真田町大字長7199-1
☎ 0268-72-2655